

曹洞宗經典

天神山 貞昌院

曹洞宗經典

天神山 貞昌院



曹洞宗經典

天神山 貞昌院



# 目次

開經偈	5
懺悔文	5
三歸禮文	6
四弘誓願文	7
摩訶般若波羅蜜多心經	8
大悲心陀羅尼	10
舍利禮文	13
妙法蓮華經觀世音菩薩普門品偈	14
妙法蓮華經如來壽量品偈	18
參同契	21

宝鏡三昧	第一章	總序	懺悔滅罪	受戒入位	發願利生	行持報恩	説教誡經	普回向	在家略回向	普勸坐禪儀	五觀の偈
24	28	28	32	34	39	45	50	76	77	78	86



釈迦牟尼仏坐像[貞昌院]

開經偈 かいきょうげ

無上甚深微妙法 むじょうじんじんみみょうぼう  
我今見聞得受持 がこんけんもんとくじゆじ

百千萬劫難遭遇 ひやくせんまんごうなんそうぐう  
願解如來真實義 がんげによらいしんじつぎ

懺悔文 ざんげもん

我昔所造諸惡業 がしやくしよぞうしよあくごう  
從身口意之所生 じゆうしんくいししよしよ

皆由無始貪瞋癡 かいゆうむしとんじんち  
一切我今皆懺悔 いっさいがこんかいざんげ

三歸礼文 さんきらいもん

自歸依仏 じいきえぶつ

当願衆生 とうがんしゅじょう

体解大道 たいげだいどう

発無上意 ほつむじょうい

自歸依法 じいきえほう

当願衆生 とうがんしゅじょう

深入経蔵 じんにゆうきょうぞう

智慧如海 ちえによかい

自歸依僧 じいきえそう

当願衆生 とうがんしゅじょう

統理大衆 とうりだいしゅう

一切無礙 いっさいむげ

四し弘ぐ誓せい願がん文もん

衆しゅじょう生じょう無む辺へん誓せい願がん度ど

煩ぼんのう惱う無む尽じん誓せい願がん断だん

法ほう門もん無む量りょう誓せい願がん学がく

仏ぶつ道どう無む上じょう誓せい願がん成じょう

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。

度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是

空。空即是色。受想行識。亦復如是。舍利子。是諸

法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。是故空

中。無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色声香味

觸法。無眼界乃至無意識界。無無明亦無無明盡。乃

至し無む老ろう死し。亦やく無む老ろう死し尽じん。無む苦く集じゅう滅めつ道どう。無む智ち亦やく無む得とく。  
 以い無む所しょ得とく故こ。菩ぼ提だい薩さつ埵た。依え般はん若にゃ波は羅ら蜜み多た故こ。心しん無む罣け  
 礙げ。無む罣け礙げ故こ。無む有う恐く怖ふ。遠おん離り一い切っ顛てん倒どう夢む想そう。究く竟ぎょう  
 涅ね槃はん。三さん世ぜ諸しよ仏ぶつ。依え般はん若にゃ波は羅ら蜜み多た故こ。得とく阿あ耨のく多た羅ら三さん  
 藐みやく三さん菩ぼ提だい。故こ知ち般はん若にゃ波は羅ら蜜み多た。是ぜ大だい神じん呪しゆ是ぜ大だい明みょう呪しゆ。  
 是ぜ無む上じょう呪しゆ。是ぜ無む等とう等とう呪しゆ。能のう除じよ一い切っ苦く。真しん實じつ不ふ虛こ。故こ  
 說せつ般はん若にゃ波は羅ら蜜み多た呪しゆ。即そく說せつ呪しゆ曰わつ。羯ぎや諦てい。羯ぎや諦てい。波は羅ら羯ぎや  
 諦てい。波は羅ら僧そう羯ぎや諦てい。菩ぼ提だい薩さつ婆わ訶か。般はん若にゃ心しん經ぎょう。



大悲心陀羅尼  
(大悲咒)

南無喝囉怛那。哆囉夜耶。南無阿唎耶。婆盧羯帝灑  
盜囉耶。菩提薩哆婆耶。摩訶薩哆婆耶。摩訶迦嚧尼  
迦耶。唵。薩皤囉罰曳數怛那怛写。南無悉吉唵埵伊  
蒙。阿唎耶。婆盧吉帝。室仏囉。楞駄婆。南無那  
囉。謹墀醯唎。摩訶皤哆。沙吽薩婆。阿他豆輸朋。  
阿遊孕。薩婆薩哆。那摩婆伽。摩罰特豆。怛姪他。  
唵。阿婆盧醯。盧迦帝。迦羅帝。夷醯唎摩訶。菩提

薩埵サート。薩婆薩婆サーぼーサーぼー。摩囉摩囉もーらーもーらー。摩醯摩醯もーきーもーきー。唎馱孕俱盧りーとーいんくーりよー  
 俱盧くーりよー。羯蒙度盧度盧けーもーとーりよーとーりよー。罰闍耶帝ほーじやーやーちー。摩訶罰闍耶帝もーこーほーじやーやーちー。陀  
 囉陀囉らーとーらー。地唎尼ちりにー。室仏囉耶しふらーやー。遮囉遮囉しゃろーしゃろー。麼麼罰摩もーもーはーもー  
 囉らー。穆帝隸ほーちりー。伊醯伊醯いーきーいーきー。室那室那しーのーしーのー。阿囉唵仏囉舍おらさんふらしゃ  
 利りー。罰沙罰唵はーざーはーざん。仏囉舍耶ふらしゃやー。呼盧呼盧くーりよーくーりよー。摩囉呼盧呼もーらーくーりよーくー  
 盧りよー。醯唎婆囉婆囉きりーしゃろーしゃろー。悉唎悉唎しーりーしーりー。蘇嚧蘇嚧すーりよーすーりよー。菩提夜ふじやー。  
 菩提夜ふじやー。菩馱夜菩馱夜ふどやーふどやー。彌帝唎夜みーちりやー。那囉謹墀のらきんじー。地唎ちり  
 瑟尼那しゆにのー。婆夜摩那ほやもの。娑婆訶そもこー。悉陀夜しどやー。娑婆訶そもこー。摩訶もこ  
 悉陀夜しどやー。娑婆訶そもこー。悉陀唵芸しどゆーきー。室幡囉耶しふらーやー。娑婆訶そもこー。那の

囉謹墀らきんじー。娑婆訶そもこー。摩囉那囉娑婆訶もーらーのーらーそもこー。悉囉僧阿穆佉しらすーおもぎゃー  
 耶やー。娑婆訶そもこー。娑婆摩訶悉陀夜そぼもこしどやー。娑婆訶そもこー。者吉囉阿悉しゃきらーおし  
 陀夜どーやー。娑婆訶そもこー。波哆摩羯悉哆夜ほどもぎゃしどやー。娑婆訶そもこー。那羅謹墀のらきんじー  
 皤伽羅耶はーぎやらやー。娑婆訶そもこー。摩婆利勝羯羅耶もーほりしんぎやらやー。娑婆訶そもこー。  
 南無喝囉怛那哆囉耶夜なむからたんのうとらやーやー。南無阿唎耶なむおりやー。婆盧吉帝ぼりよきーちー。爍し  
 皤囉夜ふらーやー。娑婆訶そもこー。悉殿都漫多囉してどーもどら。跋陀耶ほどやー。娑婆訶そもこー。

舎利禮文 しゃりらいもん

一心頂礼 いっしんちやうらい

万徳円満 まんとくえんまん

釈迦如来 しゃかによらい

真身舎利 しんじんしゃり

本地法身 ほんじほっしん

法界塔婆 ほっかいとうば

我等礼敬 がどうらいきやう

為我現身 いーがーげんしん

入我我入 にやうががにやう

仏加持故 ぶつかーじーこー

我証菩提 がーしやうぼーだい

以仏神力 いーぶつじんりき

利益衆生 りーやくしゆじやう

発菩提心 ほつぼーだいしん

修菩薩行 しゆぼさつぎやう

同入円寂 どうにやうえんじやく

平等大智 びやうどうだいち

今將頂礼 こんじやうちやうらい

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品偈

或 在 須 弥 峰	或 漂 流 巨 海	或 漂 流 巨 海	或 漂 流 巨 海	或 漂 流 巨 海	或 漂 流 巨 海
為 人 所 推 墮	念 彼 觀 音 力	念 彼 觀 音 力	念 彼 觀 音 力	念 彼 觀 音 力	念 彼 觀 音 力
如 日 虛 空 住	波 浪 不 能 沒	波 浪 不 能 沒	波 浪 不 能 沒	波 浪 不 能 沒	波 浪 不 能 沒

世尊妙相具  
具足妙相尊  
弘誓深如海  
我為汝略說  
假使興害意  
或漂流巨海  
或在須弥峰

我今重問彼  
偈答無尽意  
歷劫不思議  
聞名及見身  
推落大火坑  
竜魚諸鬼難  
為人所推墮

仙子何因緣  
汝聽觀音行  
侍多千億仏  
心念不空過  
念彼觀音力  
念彼觀音力  
念彼觀音力

名為觀世音  
善応諸方所  
発大清淨願  
能滅諸有苦  
火坑變成池  
波浪不能沒  
如日虚空住

或被惡人逐	或值怨賊繞	或遭王難苦	或囚禁枷鎖	呪詛諸毒藥	或遇惡羅刹	若惡獸圍繞	蚺蛇及蝮蠍	雲雷鼓掣電
墮落金剛山	各執刀加害	臨刑欲壽終	手足被杻械	所欲害身者	毒竜諸鬼等	利牙爪可怖	氣毒煙火燃	降雹澍大雨
念彼觀音力	念彼觀音力	念彼觀音力	念彼觀音力	念彼觀音力	念彼觀音力	念彼觀音力	念彼觀音力	念彼觀音力
不能損一毛	咸即起慈心	刀尋段段壞	釈然得解脫	還著於本人	時悉不敢害	疾走無辺方	尋声自回去	応時得消散

衆生被 <sub>レ</sub> 困厄	無量苦逼身	觀音妙智力	能救世間苦
具足神通力	広修智方便	十方諸国土	無刹不現身
種種諸惡趣	地獄鬼畜生	生老病死苦	以漸悉令滅
真觀清淨觀	広大智慧觀	悲觀及慈觀	常願常瞻仰
無垢清淨光	慧日破諸闇	能伏災風火	普明照世間
悲体戒雷震	慈意妙大雲	澍甘露法雨	滅除煩惱燄
諍訟經官処	怖畏軍陣中	念彼觀音力	衆怨悉退散
妙音觀世音	梵音海潮音	勝彼世間音	是故須常念
念念勿生疑	觀世音淨聖	於苦惱死厄	能為作依怙



具一切功德。慈眼視衆生。福聚海無量。是故応頂礼  
ぐーいっさいくどく じーげんじーしゅーじよう ふくじゅーかいむーりよう せーこーおうちようらい  
 爾時。持地菩薩。即從座起。前白仏言。世尊。若有  
にーじー じーじーぼーさー そくじゅうざーきー ぜんびやくぶつごん せーそん にかくうー  
 衆生。聞是觀世音菩薩品。自在之業。普門示現。神  
しゅーじよう もんぜーかんぜーおんぼーさーほん じーざいしーごう ふーもんじーげん じん  
 通力者。当知是人。功德不少。仏説是普門品時。衆  
ずうりきしやー どうちーぜーにん くどくふーしょう ぶつせつぜーふーもんほんじー しゅー  
 中八万四千衆生。皆発無等等阿耨多羅三藐三菩提  
ちゅうはちまんしーせんしゅーじよう かいほつむーとうどうあーのくたーらーさんみやくさんぼーだい  
 心。  
しん



みょうほうれんげきょうによらいじゅりょうぼんげ  
**妙法蓮華經如來壽量品偈**

自我得仏来	じーがーとくぶつらい	所經諸劫数	しよーきやうしよーこうしゆー	無量百千万	むーりやうひやくせんまん	億載阿僧祇	おくさいあーそうぎー
常説法教化	じやうせつぽうきやうけー	無数億衆生	むーしゆーおくしゆーじやう	令入於仏道	りやうにゆうおーぶつどう	爾來無量劫	にーらいむーりやうこう
為度衆生故	いーどーしゆーじやうこー	方便現涅槃	ほうべんげんねーはん	而實不滅度	にーじつふーめつどー	常住此説法	じやうじゆうしーせつぽう
我常住於此	がーじやうじゆうおーしー	以諸神通力	いーしよーじんずうりき	令顛倒衆生	りやうてんどうしゆーじやう	雖近而不見	すいごんにーふーけん
衆見我滅度	しゆーけんがーめつどー	広供養舍利	こうくーやうしやーりー	咸皆懷戀慕	げんかいえーれんぼー	而生渴仰心	にーしやうかつごうしん
衆生既信伏	しゆーじやうきーしんぶく	質直意柔軟	しつじきいーにゆうなん	一心欲見仏	いっしんよくけんぶつ	不自惜身命	ふーじーしゃくしんみやう
時我及衆僧	じーがーぎやうしゆーそう	俱出靈鷲山	ぐーしゆつりやうじゆーせん	我時語衆生	がーじーごーしゆーじやう	常在此不滅	じやうざいしーふーめつ
以方便力故	いーほうべんりきこー	現有滅不滅	げんぬーめつふーめつ	余国有衆生	よーこくうーしゆーじやう	恭敬信樂者	くーぎやうしんぎやうしやー

我復於彼中 がーぶーおーひーちゆう	為説無上法 いーせつむーじようほう	汝等不聞此 にょーとうふーもんしー	但謂我滅度 たんにーがーめつどー
我見諸衆生 がーけんしよーしゅーじよう	没在於苦海 もつざいおーくーかい	故不為現身 こーふーいーげんしん	令其生渴仰 りようごーしよつかつごう
因其心恋慕 いんごーしんれんぼー	乃出為説法 ないしゅついーせつぽう	神通力如是 じんずうりきにょーぜー	於阿僧祇劫 おーあーそうぎーこう
常在靈鷲山 じようざいりようじゅーせん	及余諸住処 ぎゆうよーしよーじゅうしよー	衆生見劫尽 しゅーじようけんこうじん	大火所燒時 だいかーしよーしよーじー
我此土安穩 がーしーどーあんのん	天人常充滿 てんにんじようじゅうまん	園林諸堂閣 おんりんしよーどうかく	種種宝莊嚴 しゅーじゅーほうしよーごん
宝樹多華果 ほうじゅーたーけーかー	衆生所游樂 しゅーじようしよーゆうらく	諸天擊天鼓 しよーてんきやくてんくー	常作衆伎樂 じようさーしゅーぎーかく
雨曼陀羅華 うーまんだーらーけー	散仏及大衆 さんぶつぎゆうだいしゅー	我淨土不毀 がーじようどーふーきー	而衆見燒尽 にーしゅーけんしよーじん
憂怖諸苦惱 うーふーしよーくーのう	如是悉充滿 にょーぜーしつじゅうまん	是諸罪衆生 ぜーしよーざいしゅーじよう	以惡業因縁 いーあくごういんねん
過阿僧祇劫 かーあーそうぎーこう	不聞三宝名 ふーもんさんぼうみやう	諸有修功德 しよーうーしゅーくーどく	柔和質直者 にゅうわーしつじきしやー

得入無上道 とくにゆうむじょうどう	隨応所可度 ずいおうしよーかーどー	放逸著五欲 ほういつじやくごーよく	為凡夫顛倒 いーほんぶーてんどう	實在而言死 じつざいにーごんしー	当断令永尽 とうだんりょうようじん	壽命無数劫 じゆーみようむーしゆーこう	久乃見仏者 くーないけんぶつしやー	則皆見我身 そくかいけんがーしん
速成就仏身 そくじょうじゆーぶつしん	為説種種法 いーせつしゆーじゆーほう	墮於惡道中 だーおーあくどうちゆう	實在而言滅 じつざいにーごんめつ	無能説虚妄 むーのうせつこーもう	仏語実不虛 ぶつごーじつふーこー	久修業所得 くーしゆーごうしよーとく	為説仏難値 いーせつぶつなんちー	在此而説法 ざいしーにーせつぽう
每自作是念 まいじーさーぜーねん	我常知衆生 がーじょうちーしゆーじょう	以常見我故 いーじょうけんがーこー	我亦為世父 がーやくいーせーぶー	如医善方便 にょーいーぜんほうべん	汝等有智者 にょーとーうーちーしやー	我智力如是 がーちーりきにょーぜー	或時為此衆 わくじーいーしーしゆー	說仏壽無量 せつぶつじゆーむーりよう
以何令衆生 いーがーりようしゆーじょう	行道不行道 ぎょうどうふーぎょうどう	而生憍恣心 にーしやうきやうしーしん	救諸苦患者 ぐーしよーくーげんしやー	為治狂子故 いーじーおうしーこー	勿於此生疑 もつとーしーしやうぎー	慧光照無量 えーこうしやうむーりよう	慧光照無量 えーこうしやうむーりよう	慧光照無量 えーこうしやうむーりよう

# 参同契

竺土大仙の心、東西密に相附す、人根に利鈍あり、  
道に南北の祖なし

靈源明に皓潔たり、支派暗に流注す、事を執するも  
元これ迷い、理に契うも亦悟にあらず

門門一切の境、回互と不回互と、回してさらに相渉  
る、しからざれば位によつて住す

色もと質像を殊にし声もと楽苦を異にす、暗は上中

の言ことに合かない、明めいは清濁せいだくの句くを分わかつ

四大しだいの性しょうおのずから復ふくす、子この其その母ははを得うるがごと

し、火ひは熱ねつし、風かせは動揺どうよう、水みずは湿うるおい地ちは堅固けんご、眼まなこは

色いろ、耳みみは音声おんじょう、鼻はなは香か、舌したは鹹酢かんそ、しかも一一いちいちの法ほう

において、根ねによつて葉分布はぶんぷす、本末ほんまつすべからしゆうく宗しゆう

に歸きすべし、尊卑そんび其その語ごを用もちゆ

明中めいちゆうに当あたつて暗あんあり、暗相あんそうをもつて遇あうことなかれ、

暗中あんちゆうに当あたつて明めいあり、明相めいそうをもつて觀みることなかれ

明暗めいあんおのおの相対あいたいして、比ひするに前後ぜんごの歩あゆみみのごと

し、万物ばんもつおのずから功こうあり、当まさに用ようと処しよとを言うべ  
し、事存じそんすれば函蓋合かんがいがつし、理応りおうすれば箭鋒挂せんぼうさそう  
言ことを承うけてはすべからく宗しゅうを会えすべし、みずから規矩きく  
を立りつすることなかれ、触目道そくもくどうを会えせずんば、足あしを運はこ  
ぶもいづくんぞ路みちを知らん、歩あゆみをすすむれば近遠ごんのんに  
あらず、迷まようて山河せんがの固こをへだつ、謹つつしんで参玄さんげんの人ひとに  
もうす、光陰虚こういんむなしく度わたることなかれ

# 宝鏡三昧

如是によぜの法ほう、仏祖密ぶつそみつに附ふす、汝今なんじいまこれを得えたり、宜よろしく  
能よく保護ほうごすべし、銀盃ぎんわんに雪ゆきを盛もり、明月めいげつに驚ろを蔵かくす、  
類るいして齊ひとしからず、混こんずるときんば処ところを知る、意言こころごとに在あら  
ざれば来機らいきまた亦またおもむく、動どうずれば窠白かきゆうをなし、差たがえば顧こ  
佇ちよに落おつ、背触はいそくともに非ひなり、大火聚たいかじゆの如ごとし、但ただもんさい文彩ぶんさい  
に形あらわせば、即すなわち染汚せんわに属ぞくす、夜半正明やはんしょうめい、天晓不露てんぎょうふろ、物ものの  
ために則のりとなる、用もちいて諸苦しよくをぬく、有為うゐにあらずと



いえども、是語なきにあらず、宝鏡にのぞんで、形影  
相い観るがごとし、汝これ渠にあらず、かれ正に是な  
んじ、世の嬰兒の五相完具するが如し、不去不来、不  
起不住、婆婆和和、有句無句、ついに物を得ず、語いま  
だ正しからざるがゆえに、重離六爻、偏正回互、疊ん  
で三となり、変じ尽きて五となる、莖艸の味のごと  
く、金剛の杵のごとし、正中妙挟、敲唱雙びあぐ、宗に  
通じ途に通ず、挟帯挟路、錯然なるときんば吉なり、  
犯忤すべからず、天真にして妙なり、迷悟に属せず、



因縁時節、寂然として照著す、細には無間に入り、大  
には方所を絶す、毫忽の差、律呂に応ぜず、今頓漸あ  
り、宗趣を立するによつて、宗趣わかる、即ち是れ規  
矩なり、宗通じ趣極るも、真常流注、外寂に内揺くは、  
繋げる駒、伏せる鼠（繋駒伏鼠）、先聖これを悲しん  
で、法の檀度となる、其の顛倒に随つて縊をもつて素  
となす、顛倒想滅すれば、宵心みずから許す、古轍に  
合わんと要せば、請う前古を觀ぜよ、仏道を成ずるに  
なんなんとして、十劫樹を觀ず、虎の欠たるがごと

く、馬うまの鼻よめの如ごとし（虎この欠けつの如ごとく馬めの鼻しゅうの如ごとし）、下劣げれつ  
あるをもつて、宝几ほうき珍御ちんぎよ、驚異きょういあるをもつて、狸奴りぬ白びやく  
牯こ、羿げいは巧力ぎょうりきをもつて、射いて百步ひゃつぽに中あつ、箭鋒せんぼうあい値あ  
う、巧力ぎょうりきなんぞ預あずからん、木人ぼくじんまさうたに歌うたい、石女せきじよたつて  
舞まう、情識じょうしきの到いたるにあらず、むしろ思慮しりよを容いれんや、臣しんは  
君きみに奉ぶし、子こは父ちちに順じゆんず、順じゆんぜざれば孝こうにあらず、奉ぶ  
せざれば輔ほにあらず。潜行せんこう密用みつようは、愚ぐのごとく魯ろのご  
とし、只ただ能よく相そう続ぞくするを、主中しゅちゆうの主しゅと名なづく。

# 修証義しゆしやうぎ

## 第一章 総序そつじよ

生しやうを明あきらめ死しを明あきらむるは仏ぶつ家け一いち大だい事じの因いん縁ねんなり、生しやう  
死じの中なかに仏ほとけあれば生しやう死じなし、但ただ生しやう死じ即すなわち涅槃ねはんと心得こころえ  
て、生しやう死じとして厭いとうべきもなく、涅槃ねはんとして欣ねごうべき  
もなし、是このとき初はじめて生しやう死じを離はなるる分ぶんあり、唯ただ一いち大だい事じ因いん  
縁ねんと究くわう尽じんすべし。人にん身しん得うること難かたし、仏ぶつ法ぽう値おうこと希ま  
れなり、今いま我われ等ら宿しゆく善ぜんの助たすくるに依よりて、已すでに受うけ難かたき

人身にんしんを受けうけたるのみに非あらず、遇あい難がたき仏法ぶつぽうに値あい奉たてまつれり、生死しやうじの中なかの善生ぜんしやう、最勝さいしやうの生しやうなるべし、最勝さいしやうの善身ぜんしんを徒いたずらにして露命ろめいを無常むじやうの風かせに任まかすること勿なかれ。無常むじやう憑たのみ難がたし、知しらず露命ろめいいかなる道みちの草くさにか落おちん、身み已すでに私わたくしに非あらず、命いのちは光陰こういんに移うつされて暫しばらくも停とどめ難がたし、紅顔こうがんいづくへか去さりにし、尋たずねんとするに蹤跡しようせきなし、熟觀つらつらんずる所ところに往事おうじの再ふたたび逢おうべからざる多おほし、無常むじやう忽たちまちに到いたるときは国王こくおう大臣だいじん親暱しんじつじゆう従ぼくさい僕妻子しちんほう珍宝ちんほうたすくる無なし、唯ただ独ひとり黄泉こうせんに趣おもむくのみ

なり、己おのれに随したがい行くは只是ただこれ善ぜん悪あく業ごつ等とうのみなり。  
今いまの世よに因果いんがを知らず業報ごつぼうを明あきらめず、三世さんぜを  
知しらず、善ぜん悪あくを弁わきまえざる邪見じゃけんの党侶ともがらには群ぐんす  
べからず、大凡おおよそ因果いんがの道理どうり歴然れきねんとして私わたくしなし、造ぞう  
悪あくの者ものは墮おち修善しゆぜんの者ものは陞のぼる、豪釐ごうりも忒たがわざるな  
り、若もし因果いんが亡ぼうじて虚むなしからんが如ごときは、諸しよ仏ぶつ  
の出世しゆつせあるべからず、祖師そしの西来せいらいあるべからず。  
善ぜん悪あくの報ほうに三時さんじあり、一者ひとつ順現報受じゆんげんほうじゆ、二者ふたつ順次じゆんじ  
生受しやうじゆ、三者みつ順後次受じゆんごじゆ、これを三時さんじという、仏ぶつ

祖その道どうを修習しゅじゅうするには、其その最初さいしよより斯この三時さんじの  
業報ごつぼうの理りを効ならい験あきらむるなり、爾しかあらざれば  
多おおく錯あやまりて邪見じゃけんに墮おつるなり、但ただ邪見じゃけんに墮おつ  
るのみに非あらず、悪道あくどうに墮おちて長時ちようじの苦くを受うく。  
当まさに知るべし今生こんじようの我身わがみ二ふたつ無なし、三みつ無なし、徒いたずらに  
邪見じゃけんに墮おちて虚むなしく悪業あくごうを感得かんとくせん、惜おしからざらめや、  
悪あくを造つくりながら悪あくに非あらずと思おもい、悪あくの報ほうあるべからず  
と邪思じゃしゆい惟よするに依よりて悪あくの報ほうを感得かんとくせざるには非あらず。

## 第二章 懺悔滅罪

仏祖ぶつそ憐あわれみの余あまり広こう大だいの慈じ門もんを開ひらき置おけり、是これ一切いっさい衆しゆ生じようを証しよう入にゆうせしめんが為ためなり、人にん天てん誰たれか入いらざらん、彼かの三さん時じの悪あく業ごつ報ぼう必かならず感かんずべしと雖いえども、懺さん悔げするが如ごときは重おもきを転てんじて軽きよう受じゆせしむ、又また滅めつ罪ざい清しよう淨じようならしむるなり。然しかあれば誠じよう心しんを専もつらにして前ぜん仏ぶつに懺さん悔げすべし、憊いん麼もするとき前ぜん仏ぶつ懺さん悔げの功く徳どく力りき我われを拯すくいて清しよう淨じようならしむ、此この功く徳どく能よく無む礙げの淨じよう信しん精しよう進じんを生しよう長ちようせ

しむるなり、淨信じようしんいちげん一現するるとき、自じ他た同おなじくてん転てんぜ  
 らるるなり、其その利益りやく普あまねく情じよう非ひ情じように蒙こうぶらしむ。  
 其その大だい旨しは、願ねがわくは我われたと設かいこ過あ去くの悪あく業ごう多おく重かさな  
 りて障しよう道どうの因いん縁ねんありとも、仏ぶつ道どうに因よりて得とく道どうせり  
 し諸しよ仏ぶつ諸しよ祖そ我われをあわれ愍ごうみるいて業げ累だつを解げ脱だつせしめ、学がく  
 道どう障ざわり無なからしめ、其その功く徳とく法ほう門もん普あまねく無む尽じん法ほつ界かい  
 に充じゆう満まん弥み綸りんせらん、哀あわれみを我われに分ぶん布ぶすべし、仏ぶつ  
 祖その往おう昔しやくは吾われ等らなり、吾われ等らが当とう来らいは仏ぶつ祖そならん。  
 我が昔しやく所しよ造ぞう諸しよ悪あく業ごう、皆かい由ゆう無む始し貪とん瞋じん痴ち、從じゆう身しん口く意い之し所しよ



生しやう、一切いっさい我が今こん皆かい懺悔さんげ、是かくの如ごとく懺悔さんげすれば必かならず仏祖ぶつその冥助みやうじよあるなり、心念しんねん身儀しんぎ発露ほつろ白びやく仏ぶつすべし、発露ほつろの力ちから罪根ざいこんをして銷殞しやういんせしむるなり。

### 第三章 受戒入位じゆかいにゆうい

次つぎには深ふかく仏法僧ぶつぽうそうの三寶さんぼうを敬うやまい奉たてまつるべし、生しやうを易かえ身みを易かえても三寶さんぼうを供養くやうし敬うやまい奉たてまつらんことを願ねがうべし、西天東土さいてんととう仏祖ぶつそ正伝しやうでんする所ところは恭敬くぎやう仏法僧ぶつぽうそうなり。若もし薄福少徳はくふくしやうとくの衆生しゆじやうは三寶さんぼうの名字みやうじ猶なお聞きき奉たてまつらざる

なり、何いかに況いわんや歸依きえし奉たてまつることを得えんや、徒いたずらに所しよ  
逼ひつを怖おそれて山神鬼神等さんじんきじんとうに歸依きえし、或あるいは外道げどうの制多せいだ  
に歸依きえすること勿なかれ、彼かれは其歸依そのきえに因よりて衆苦しゆくを  
解脱げだつすること無なし、早はやく仏法僧ぶつぼうそうの三寶さんぼうに歸依きえし奉たてまつ  
りて衆苦しゆくを解脱げだつするのみに非あらず菩提ぼだいを成就じようじゆうすべし。  
其歸依三寶そのきえさんぼうとは正まさに淨心じようしんを專もつぱらにして或あるいは如來にょらい現在げんざい  
世せにもあれ、或あるいは如來滅後にょらいめつごにもあれ、合掌がっしようし低頭ていず  
して口くちに唱となえて云いわく、南無歸依なむきえぶつ、南無歸依法なむきえほう、  
南無歸依僧なむきえそう、仏ほとけは是これ大師だいしなるが故ゆえに歸依きえす、法ほう

は良薬りようやくなるが故ゆえに歸依きえす。僧そうは勝友しょうゆうなるが故ゆえに歸依きえす、仏弟子ぶつでしとなることかなら必ず三歸さんきに依よる、何れいずの戒かいを受うくるも必ず三歸さんきを受うけて其後そののち諸戒しよかいを受うくるなり、然しかあれば即すなわち三歸さんきに依よりて得戒とくかいあるなり。此この歸依きえ佛法僧ぶつぽうそうの功德くどく、必ず感応道交かんのうどうこうするとき成就じょうじゆうするなり、設たとい天上人間てんじょうにんげん地獄鬼畜じごくきちくなりと雖いえども、感応道かんのうどう交こうすれば必ず歸依きえし奉たてまつるなり、已すでに歸依きえし奉たてまつるが如ごときは生生世世しやうしやうせ在在處處せざいざいしよしよに增長ぞうちようし、必ず積功累徳かたらしやつくるいとくし、阿耨多羅三藐三菩提あのおくたを成就じやうじゆうするなり、知しるべし三さん

歸きの功徳くどく其れ最尊さいそん最上さいじょう甚深じんじん不可思議ふかしぎなりといふこ  
 と、世尊せそん已すでに証明しょうみします、衆生しゅじょう當まさに信受しんじゆすべし。  
 次つぎには応まさに三聚淨戒さんじゆじようかいを受け奉うるべし、第一だいいち攝しよく  
 律儀戒りつぎかい、第二だいに攝善法戒しよくぜんぽうかい、第三だいに攝衆生戒しよくじゆうかいなり、  
 次つぎには応まさに十重禁戒じゆうじゆうきんかいを受け奉うるべし、第一だいいち不ふ  
 殺生戒せつしよくかい、第二だいに不偷盜戒ふちゆうとうかい、第三だいに不邪淫戒ふじやいんかい、第四だいに  
 不妄語戒ふもうごかい、第五だいに不酤酒戒ふこしゆくかい、第六だいに不説過戒ふせつかかい、第だいに  
 七しち不自讚毀じさんき佗戒たかい、第八だいに不慳法財戒ふけんぽうさいかい、第九だいに不瞋ふしん  
 恚戒いかい、第十だいに不謗ふぼう三寶戒さんぽうかいなり、上來じようらい三歸さんき三聚淨さんじよく

戒、十重禁戒、是れ諸仏の受持したまう所なり。  
受戒するが如きは、三世の諸仏の所証なる阿耨多羅  
三藐三菩提金剛不壞の仏果を証するなり、誰の智人  
か欣求せざらん、世尊明らかに一切衆生の為に示し  
まします、衆生仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に入  
る、位大覺に同うし已る、真に是れ諸仏の子なりと。  
諸仏の常に此中に住持たる、各々の方面に知覺を遺  
さず、群生の長えに此中に使用する、各々の知覺に  
方面露れず、是時十方方法界の土地草木牆壁瓦礫皆仏

事じを作なすを以もつて、其起そのおこす所ところの風水ふうすいの利益りやくに預あずかる輩ともがら、  
皆みな甚妙じんみょう不可ふ思議かしぎの仏化ぶつけに冥資みょうしせられて親ちかき悟さとを顕あらわ  
す、是これを無為むいの功徳くどくとす、是これを無作むさの功徳くどくとす、是こ  
れ発はつ菩提心ぼだいしんなり。

#### 第四章 発願利生

菩提心ぼだいしんを発おこすというは、己おのれ未いまだ度わたらざる前さきに一いっ  
切衆生さいしゅじょうを度わたさんと発願ほつがんし営いとなむなり、設たとい在家ざいけにも  
あれ、設たとい出家しゅつけにもあれ、或あるいは天上てんじょうにもあれ、或あるい

は人間にんげんにもあれ、苦くにありというとも楽らくにありと  
いうとも、早くはや自未得度先度佗たの心こころを發おこすべし。  
其形陋そのかたぢいしというとも、此心このこころを發おこせば、已すでに一いっ  
切衆生さいしゅじょうの導師どうしなり、設たとい七歳しちさいの女流にょりゅうなりとも  
即すなわち四衆ししゅの導師どうしなり、衆生しゅじょうの慈父じふなり、男女なんによ  
を論ろんずること勿なかれ、此これ仏道極妙ぶつどうごくみょうの法則ほうそくなり。  
若もし菩提心ぼだいしんを發おこして後のち、六趣四生ろくしゅししやうに輪轉りんてんすと雖いえども、  
其輪轉そのりんてんの因縁皆菩提いんねんみなぼだいの行願ぎやうがんとなるなり、然しかあれば  
従来じゆうらいの光陰こういんは設たとい空むなしく過すごすというとも、今生こんじやう



の未だ過ぎざる際だに急ぎて発願すべし、設い仏  
に成るべき功德熟して円満すべしというとも、尚  
お廻らして衆生の成仏得道に回向するなり、或は  
無量劫行いて衆生を先に度して自からは終に仏に  
成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。  
衆生を利益すというは四枚の般若あり、一者布  
施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩  
埵の行願なり、其布施というは貪らざるなり、  
我物に非ざれども布施を障えざる道理あり、其



物の軽きを嫌わず、其功の実なるべきなり、然  
あれば即ち一句一偈の法をも布施すべし、此生  
佗生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべ  
し、此世佗世の善根を兆す、法も財なるべし、  
財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず、自から  
が力を頷つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀  
度なり、治生産業固より布施に非ざること無し。  
愛語というは、衆生を見るに、先ず慈愛の心を  
発し、顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤

子の懐おもいを貯たくわえて言ごん語ごするは愛あい語ごなり、徳とくある  
は讚ほむべし、徳とくなきは憐あわれむべし、怨おん敵てきを降ごう伏ぶくし、  
君子くんしを和わ睦ぼくならしむること愛あい語ごを根こん本ぼんとするな  
り、面むかいて愛あい語ごを聞きくは面おもてを喜よろこばしめ、心こころを樂たのし  
くす、面むかわずして愛あい語ごを聞きくは肝きもに銘めいじ魂たましいに銘めい  
ず、愛あい語ご能よく廻かいてん天ちからの力ちからあることを学がくすべきなり。  
利行りぎようというは貴き賤せんの衆生しゆじように於おきて利り益やくの善巧ぜんぎようを廻めぐ  
すなり、窮きゆう亀きを見病雀みびようじやくを見みしとき、彼かれが報謝ほうしゃを求もとめ  
ず、唯ただ単ひとえに利行りぎように催もよおさるるなり、愚ぐ人にん謂おもわくは

利り他たを先さきとせば自みづからが利り省はぶれぬべしと、爾しかには非あら  
ざるなり、利行りぎようは一法いっぽうなり、普あまねく自他じたを利りするなり。  
同事どうじというは不違ふいなり、自じにも不違ふいなり、他た  
にも不違ふいなり、譬たとえば人間にんげんの如来にょらいは人間にんげんに同どう  
ぜるが如ごとし、他たをして自じに同どうぜしめて後のちに自じ  
をして他たに同どうぜしむる道理どうりあるべし、自他じたは  
時ときに随したごうて無窮むきゆうなり、海うみの水みづを辞じせざるは同どう  
事じなり、是故このゆえに能よく水みづ聚あつまりて海うみとなるなり。  
大凡おおよそ菩提心ぼだいしんの行願ぎようがんには是かくの如ごとく道理どうり静しずかに思惟しゆいす

べし、卒爾そつじにすること勿れなか、濟度さいど攝受しやうじゆに一切衆生いっさいしゆじやうみな皆みな化けを被こぶらん功德くどくを礼拝らいはい恭敬くぎやうすべし。

## 第五章

### 行持報恩ぎやうじほうおん

此この發ほつ菩提心ぼだいしん、多おほくは南閻浮なんえんぶの人身にんしんに發心ほつしんすべ  
きなり、今いま是かくの如ごとくの因縁いんねんあり、願がん生しやう此し娑婆しゃば  
国土こくどし来きたれり、見釈迦牟尼けんしやくかにぶつ仏ぶつを喜よろこばざらんや。  
静しずかに憶おもうべし、正法世しやうぼうよに流布るふせざらん時ときは、身しん  
命めいを正法しやうぼうの為ために抛捨ほうしやせんことを願ねごうとも値おうべか

らず、正法しょうぼうに逢おう今日こんにちの吾等われらを願ねごうべし、見みず  
や、仏ほとけの言のたまわく、無上むじょう菩提ぼだいを演説えんぜつする師しに値あわん  
には、種姓しゅじょうを觀かんずること莫なかれ、容顔ようがんを見みること莫なか  
れ、非ひを嫌きらうこと莫なかれ、行おこないを考かんがうること莫なかれ、  
但ただ般若はんを尊そん重じゆうするが故ゆえに、日にち日にち三さん時じに礼らい拜はいし、恭く  
敬ぎようして、更さらに患げん惱のうの心こころを生しょうぜしむること莫なかれと。  
今いまの見けん仏ぶつ聞もん法ぼうは仏ぶつ祖そ面めん面めんの行ぎよう持じより来きたれる慈じ恩おんな  
り、仏ぶつ祖そ若もし單たん伝でんせずば、奈いか何かにしてか今日こんにちに至いたら  
ん、一いっ句くの恩おん尚なお報ほう謝しゃすべし、一いっ法ぼうの恩おん尚なお報ほう謝しゃす

べし、況いわんや正しょう法ぼう眼げん藏ぞう無む上じょう大だい法ほうの大だい恩おんこれを報ほう謝しゃせ  
ざらんや、病びよう雀じやく尚なお恩おんを忘わすれず三さん府ぶの環かん能よく報ほう謝しゃ  
あり、窮きゆう亀き尚なお恩おんを忘わすれず、余よ不ふの印いん能よく報ほう謝しゃあ  
り、畜ちく類るい尚なお恩おんを報ほうず、人じん類るい争いかでか恩おんを知しらざらん。  
其その報ほう謝しゃは余よ外げの法ほうは中あたるべからず、唯ただ当まさに日にち日にちの行ぎよう  
持じ、其その報ほう謝しゃの正しょう道どうなるべし、謂いわゆるの道どう理りは日にち日にちの  
生せい命めいを等な閑おせりにせず、私わたくしに費つひさざらんと行ぎよう持じするなり。  
光こう陰いんは矢やよりも迅すみかなり、身しん命めいは露つゆよりも脆もろし、何いず  
れの善ぜん巧ぎよう方ほう便べんありてか過すぎにし一いち日にちを復ふたたた還かえし得えた

る、徒らいたずに百歳ひやくさい生いけらんは恨うらむべき日月じつげつなり、悲かなしむ  
べき形骸けいがいなり、設たとい百歳ひやくさいの日月じつげつは声色しょうしきの奴婢ぬびと馳走ちそう  
すとも、其中そのなかいちにちいちにちの行持ぎょうじを行取ぎょうしゆせば一生いっしょうの百歳ひやくさいを行  
取しゆするのみに非あらず、百歳ひやくさいの佗生たしょうをも度取どしゆすべきな  
り、此このいちにちいちにちの身命しんめいは尊とうとぶべき身命しんめいなり、貴とうとぶべき形けい  
骸がいなり、此行持このぎょうじあらん身心しんじん自みずからも愛あいすべし、自  
からも敬うやもうべし、我等われらが行持ぎょうじに依よりて諸仏しよぶつの行持ぎょうじ  
見成げんじようし、諸仏しよぶつの大道だいどう通達つうだつするなり、然しかあれば即すなわち  
一日いちにちの行持ぎょうじ是れ諸仏しよぶつの種子しゆしなり、諸仏しよぶつの行持ぎょうじなり。

謂いわゆる諸しよぶつ仏ぶつとは釈迦牟尼しゃかむにぶつ仏ぶつなり、釈迦牟尼しゃかむにぶつ是れ即そく  
心しん是ぜ仏ぶつなり、過か去げん現ざい在みらい未しよぶつ來ともの諸ほとけ仏な、共ともに仏なと成ときる時  
は必かならず釈迦牟尼しゃかむにぶつ仏なと成なるなり、是これ即そく心しん是ぜ仏ぶつなり、  
即そく心しん是ぜ仏ぶつといたれうは誰たれといたれうぞと審しん細さいに参さん究きゆうすべし、  
正まさに仏ぶつ恩おんを報ほうずるにてあらん。



# 仏垂般涅槃略説教誡經

釈迦牟尼仏、初に法輪を転じて、阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度したもう。応に度すべき所の者は、皆已に度し訖つて、娑羅双樹の間に於て、將に涅槃に入りたまわんとす。是の時中夜寂然として声無し、諸の弟子の爲めに略して法要を説きたもう。

汝等比丘、我が滅後に於て、当に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし。闇に明に遇い、貧人の宝を得るが如

し。当まさに知しるべし、此これは即すなわち是これ汝等なんだちが大師だいしなり。若もし我われ世よに住じゆうするとも、此これに異ことなること無なり。淨じようかい戒たもを持もたん者ものは、販ばん売まい貿む易やくし、田でん宅たくを安あん置ちけん。人民にんみん奴ぬ婢び畜ちく生しようを畜ちく養ようすることを得えざれ。一切いっさいの種しゆ植じき及および諸もろの財ざい宝ほう、皆みな当まさに遠おん離りすること火か坑きようを避さくるが如ごとくすべし。草そう木もくを斬ざん伐ばつし、土どを墾たがし地ちを掘ほり、湯とう薬やくを合ごう和わし、吉きつ凶きうを占せん相そうし、星しやう宿しゆくを仰ごう觀かんし、盈よう虚こを推すい歩ほし、曆りやく数しゆ算さん計けいすることを得えざれ、皆みな応おうぜざる所ところなり。身みを節せつし時ときに食じきして、清しやう淨じようにして自じ活かつせ

よ。世事せじに参預さんよし、使命しみようを通知つうちし、呪術しゅじゆつし、仙薬せんやくし、好よしみを貴人きにんに結むすび、親厚しんこう媒慢せつまんすることを得えざれ、皆作みなさに応おうぜず。当まさに自みずから端心たんしん正念しやうねんにして度どを求もとむべし。瑕疵けしを包蔵ほうぞうし、異いを踴あらわし衆しゆを惑まとわすことを得えざれ、四供養しきやうに於おいて量りやうを知しり足たることを知るべし。趣わずかに供事くじを得えて、蓄積ちくしゃくす応べからず。此これ即すなわち略りやくして持戒じかいの相そうを説とく。戒かいは是これ正順しやうじゆん解脱げだつの本もとなり、故かるがゆえに波羅提木叉はらだいもくしやと名なづく。此この戒かいに依え因いんすれば、諸もろもろの禅定ぜんじやう及および滅苦めつくの智慧ちえを生しやうずることを得う。是この故ゆえ

に比丘びく当まさに浄戒じようかいを持たつて、毀欠きけつせしむること勿なかるべし。若もし人ひと能よく浄戒じようかいを持じすれば、是これ則すなわち能よく善法ぜんぼうあり。若もし浄戒じようかい無なければ、諸善しよぜんの功德くどくみなしやう皆生くずることを得えず。是これを以もつて当まさに知しるべし、戒かいは第一だいいち安穩あん功德のんく徳どくの所住しよじゆう処しよたることを。汝等なんだち比丘びく、已すでに能よく戒かいに住じゆうす。当まさに五根ごこんを制せいすべし、放逸ほういつにして五欲ごよくに入いらしむること勿なかれ。譬たとえば牧牛ぼくごの人ひとの杖つえを執とつて、之これを視みせしめて、縦逸じゆういつにして人ひとの苗稼みやうけを犯おかさしめざるが如ごとし。若もし五根ごこんを縦ほしま

にすれば、唯ただ五欲ごよくの将まさに涯畔がいはん無のうして制せいす可べからざるの  
みにあらず。亦また悪馬あくめの轡くつわづらを以もつて制せいせざれば、将当まさ  
に人ひとを牽ひきいて、坑陷きようかんに墜おとさんとするが如ごとし。劫害ごうがいを  
被こうむるが如ごときんば、苦く一世いつせに止とどまる。五根ごこんの賊ぞくは禍か  
殃累おうらい世せに及およぶ、害がいたること甚はなはだ重おもし、慎つつしまずんばあ  
るべからず。是この故ゆえに智ち者しゃは制せいして而しかも随したがわず。之これ  
を持じすること賊ぞくの如ごとくにして、縦逸じゆういつならしめざれ。  
仮令たとい之これを縦ほしにいままするとも、皆みな亦また久ひさしからずして其その  
磨滅まめつを見みん。此この五根ごこんは心しんを其その主しゅと為なす。是この故ゆえ

に汝等当なんだちまさに好よく心しんを制せいすべし。心しんの畏おそるべきこと毒どく  
蛇じや、悪獸あくじゆう、怨賊おんぞくよりも甚はなはだし。大火たいかの越逸おついつなるも、  
未いまだ喻たとえとするに足たらず。譬たとえば人ひとあつて手てに密器みつぎを  
執とつて、動転輕躁どうてんきやうそうして、但ただ蜜みつのみを觀みて、深坑じんきやうを  
見みざるが如ごとし。又またた狂象かうざうの鈎かぎなく、猿猴えんこうの樹きを得えて  
騰躍踔躑とうやくちやうちやくして、禁制きんせいすべきこと難かたきが如ごとし。当まさに急きゆう  
に之これを挫とりひしいて、放逸ほういつならしむること無なかるべし。此こ  
の心しんを縦ほしいままにすれば、人ひとの善事ぜんじを喪うしのう。之これを一処いっしょに制せい  
すれば、事こととして弁べんぜずということ無なし。是この故ゆえに

比丘びく当まさに勤つとめて精進しやうじんして、汝なんじが心しんを折伏しやくぶくすべし。  
汝等なんだち比丘びく、諸もろもろの飲食おんじきを受けては、当まさに薬くすりを服ふくするが  
如ごとくすべし。好よきに於おいても、悪あしきに於おいても、増減ぞうげんを  
生しやうずること勿なかれ。趣わずかに身みを支さうることを得えて以もつて飢き  
渴かつを除のぞけ。蜂はちの華はなを採とるに、但ただ其その味あじわいのみを取とつ  
て、色香しきこうを損そんせざるが如ごとし。比丘びくも亦また爾しかなり、人ひと  
の供養くやうを受けうけて趣わずかに自みづから悩のうを除のぞけ、多おほく求もとめて其その  
善心ぜんしんを壊えすることを得うること無なかれ。譬たとえば智者ちしやの牛ご  
力りきを堪たうる所ところの多た少しやうを籌量ちゆうりやうして、分ぶんに過すこして以もつて、



其その力ちからを竭つくきしめざるが如ごとし。  
 汝等なんだち比丘びく、昼ひるは則すなわち勤心ごんしんに善法ぜんぼうを修習しゆじゆうして、時ときを失しつ  
 せしむること無なかれ。初夜しよやにも後夜ごやにも亦また麤はいするこ  
 と有あること勿なかれ。中夜ちゆうやに誦經じゆきようして以もつて自みずから消息しよくそくせ  
 よ。睡眠すいみんの因縁いんねんを以もつて一いつ生しよう空むなしく過すごして所得しよくとくなから  
 しむること無なかれ。当まさに無常むじようの火ひの諸もろもろの世間せけんを焼やくこ  
 とを念ねんじて、早はやく自度じどを求もとむべし。睡眠すいみんすること勿なか  
 れ、諸もろもろの煩惱ぼんのうの賊ぞく、常つねに伺うかがつて人ひとを殺ころすこと、怨家おんけ  
 よりも甚はなはだし。安んぞ睡眠すいみんして自みずから警寤きようごせざる可べけ



んや。煩惱ぼんのうの毒蛇どくじや、眠ねむつて汝なんじが心むねに在あり、譬たとえば黒虻こくがん  
 の汝なんじが室しつに在あつて眠ねむるが如ごとし。当まさに持戒じかいの鈎かぎを以もつて早はや  
これく之びようじよを屏除すいじやすですべし。睡蛇すいじやすで既いに出いでなば乃すなわち安眠あんみんすべ  
 し。出いでざるに而しかも眠ねむるは是これ無慙むざんの人ひとなり。慙ざん恥ち  
ふくの服もろもろは諸しようごんの莊嚴おひに於もつとて最だいいちも第一だいいちなりとす。慙ざんは鉄鈎てつこう  
ごとの如ごとく、能よく人ひとの非法ひほうを制せいす。是この故ゆえに比丘常びくつねに当まさ  
ざんに慙ざん恥ちすべし、暫しばらくも替すつることを得うること勿なれ。  
も若ざんし慙ざん恥ちを離りすれば、則すなわち諸もろもろの功徳くどくを失しつす。有う愧ぎの  
ひと人は則すなわち善法ぜんぼうあり。若もし無愧むぎの者ものは諸もろもろの禽獸きんじゆうと相異あいこと

なること無けん。

汝等比丘、若し人あり来つて節節に支解するとも、

当に自ら心を摂めて瞋恨せしむること無かるべし。

亦た当に口を護るべし、悪言を出すこと勿れ。若し

恚心を縦にすれば、則ち自ら道を妨げ、功德の利を

失す。忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能わざる

所なり。能く忍を行ずる者は、乃ち名づけて有力の

大人と為すべし。若し其れ悪罵の毒を歡喜し忍受し

て、甘露を飲むが如くすること能わざるものは、入

道智慧の人と名づけず。所以は何んとなれば、瞋恚の害は、則ち、諸の善法を破り、好名聞を壊す、今世後世の人、見んことを喜わず。当に知るべし、瞋心は猛火よりも甚だし。常に当に防護して、入ることを得せしむること勿るべし。功徳を劫むるの賊は瞋恚に過ぎたるは無し。白衣受欲非行動の人、法として自ら制すること無きすら、瞋猶お怒むべし。出家行道無欲の人にして、而も瞋恚を懐けるは甚だ不可なり。譬えば清涼の雲の中に霹靂火を起すは、所

応おうに非あらざるが如ごとし。

汝等なんだち比丘びく、当まさに自みずから頭こうべを摩なづべし。已すでに飾好しきこうを捨すて

て、壊色えじきの衣ころもを着ちやくし、応器おうきを執持しゆじして、乞こつを以もつて自じ

活かつす、自見じけん是かくの如ごとし。若もし憍慢きようまん起おこらば、当まさに疾はやく之これ

を滅めつすべし。憍慢きようまんを増長ぞうちようするは、尚なおお世俗せぞく白衣びやくの宜よろ

しき所ところに非あらず。何いかに況いわんや出家入道しゆつけにゆうどうの人ひと、解脫げだつの為ため

めの故ゆえに、自みずから其その身みを降くだして而しかも乞こつを行ぎようずるをや。

汝等なんだち比丘びく、諂曲てんこくの心しんは道どうと相違そういす。是この故ゆえに宜よろしく

応まさに其その心しんを質直しつじきにすべし。当まさに知しるべし、諂曲てんこくは

但ただ欺ご誑おを為なすことを。入に道ゆうの人は則ひとち是すなの処わなり。  
是この故ゆえに汝なん等だ宜よろしく応まさに端たん心しんにして質しつ直じきを以もつて  
本ほんと為なすべし。  
汝なん等だ比び丘く、当まさに知しるべし、多た欲よくの人は利りを求もとむるこ  
と多おきが故ゆえに苦く惱のうも亦また多おし。少しょう欲よくの人は無む求ぐ無む欲よく  
なれば則すなち此この患うれ無なし、直ただ爾ちに少しょう欲よくすら尚なお応まさに修しゆ  
習じゆうすべし。何いかに況いわんや、少しょう欲よくの能よく諸もろの功く徳とくを生しず  
るをや。少しょう欲よくの人は則ひとち諂てん曲こくして以もつて人ひとの意いを求もとむ  
ること無なし。亦また復た諸しよ根こんの為ために牽ひかれず。少しょう欲よくを行ぎず

る者ものは、心こころ則すなわち坦然たんねんとして憂う畏いする所ところ無なし。事ことに触ふれて余あまり有あり、常つねに足たらざること無なし。少しょう欲よくある者ものは則すなわち涅槃ねはんあり。是これを少しょう欲よくと名なづく。汝等なんだち比丘びく、若もし諸もろもろの苦く惱のうを脱だつせんと欲ほつせば、当まぎに知ち足をそく観かんずべし。知ち足そくの法ほうは即すなわち是これ富ふ楽らく安あん穩のんの処ところなり。知ち足そくの人ひとは地ち上じょうに臥ふすと雖いえども、猶なお安あん樂らくなりとす。不知ふ知ち足そくの者ものは、天てん堂どうに処しよすと雖いえども亦また意こころに称かなわらず。不知ふ知ち足そくの者ものは富とめりと雖いえども、而しかも貧まずしし。知ち足そくの人ひとは貧まずしと雖いえども而しかも富とめり。不知ふ知ち足そくの者ものは常つねに五ご

欲よくの為ために牽ひかれて。知足ちそくの者ものの為ために憐愍れんみんせらる。是これを知足ちそくと名なづく。

汝等なんだち比丘びく、寂靜じやくじやう無為むゐの安樂あんらくを求もとめんと欲ほつせば、当まさに憤鬧かひにやうを離はなれて独處どくしよに閑居げんごすべし。靜處じやうしよの人ひとは、帝釈たいしやく諸天しよてんの共ともに敬重きやうじゆうする所ところなり。是この故ゆえに当まさに己衆こしゆ他衆たしゆを捨すてて、空閑くうげんに獨處どくしよして、滅苦めつくの本ほんを思おもうべし。

若もし衆しゆを樂ねごう者ものは則すなわち衆惱しゆのうを受うく、譬たとえば大樹だいじゆの衆しゆ鳥ちやう之これに集あつまれば、則すなわち枯折こせつの患うれいあるが如ごとし。世間せけんの縛著ばくじやくは衆苦しゆくに没ぼつす。譬たとえば老象ろうぞうの泥でいに溺おほれて、自みずから



出づること能わざるが如し。是れを遠離と名づく。  
汝等比丘、若し勤めて精進すれば、則ち事として難  
き者なし。是の故に汝等当に勤めて精進すべし。譬  
えば少水の常に流れて、則ち能く石を穿つが如し。  
若し行者の心数々懈廢すれば、譬えば火を鑽るに未  
だ熱からずして而も息めば、火を得んと欲すと雖  
も、火を得べきこと難きが如し。是れを精進と名づ  
く。

汝等比丘、善知識を求め善護助を求むることは、不



忘念もうねんに如しくは無なし。若もし不ふ忘念もうねんある者ものは、諸もろもろの煩惱ぼんのうの賊ぞく、則すなわち入いること能あたわず。是この故ゆえに汝等なんだち常に当まさに念ねんを撮おさめて心むねに在おくべし。若もし念ねんを失しつする者ものは則すなわち諸もろもろの功徳くどくを失しつす。若もし念力ねんりきけん堅強ごうなれば、五欲ごよくの賊ぞくの中なかに入いると雖いえども、為ために害がいせられず。譬たとえば鎧よろいを著きて陣じんに入いれば、則すなわち畏おそるる所ところなきが如ごとし。是これを不ふ忘念もうねんと名なづく。

汝等なんだち比丘びく、若もし念ねんを撮おさむる者ものは心則こころすなわち定じように在あり。心こころ定じように在あるが故ゆえに能よく世間せけん生滅しやうめつの法相ほつそうを知しる。是この故ゆえ

に汝等常に當に精進して、諸の定を修習すべし。若し定を得る者は心則ち散ぜず。譬えば水を惜める家の、善く提塘を治するが如し。行者も亦た爾なり、智慧の水の為めの故に、善く禪定を修して漏失せざらしむ。是れを名づけて定と為す。

汝等比丘、若し智慧あれば則ち貪著なし。常に自ら省察して失あらしめざれ。是れ則ち我が法中に於て能く解脱を得。若し爾らざる者は、既に道人に非ず、又た白衣に非ず、名づくる所なし。実智慧の者

は、則ち是れ老病死海を度る堅牢の船なり、亦た是れ無明黑暗の大明灯なり、一切病者の良薬なり、煩惱の樹を伐るの利斧なり。是の故に汝等、当に聞思修の慧を以て、而も自ら増益すべし。若し人智慧の照あれば、是れ肉眼なりと雖も、而も是れ明見の人なり。是れを智慧と名づく。

汝等比丘、若し種種の戲論は其の心則ち乱る。復た出家すと雖も、猶お未だ得脱せず。是の故に比丘当に急に乱心戲論を捨離すべし。若し汝寂滅の樂を得

んと欲せば、唯当に善く戲論の患を滅すべし。是れを不戲論と名づく。

汝等比丘、諸の功徳に於て、常に当に一心に諸の放逸を捨つること怨賊を離するが如くすべし。大悲世尊所説の利益は、皆已に究竟す。汝等但だ將に勤めて之を行ずべし。若しは山間、若しは空沢の中に於ても、若しは樹下、閑処、静室に在つても、所受の法を念じて忘失せしむること勿れ。常に当に自ら勉めて精進して之を修すべし。為すこと無うして空し

く死せば、後に悔あることを致さん。我れは良医の  
病を知て薬を説くが如し、服すと服せざるとは医の  
咎に非らず。又た善く導くものの、人を善道に導く  
が如し、之を聞いて行かざるは、導くものの過に非  
らず。

汝等比丘、若し苦等の四諦に於て疑う所ある者は、  
疾く之を問うべし。疑を懐いて決を求めざること得  
ること無かれ。爾の時に、世尊、是くの如く三たび  
唱えたもうに、人問いたてまつる者なし。所以は何

んとなれば、衆しゅう疑うたがい無なきが故ゆえに。

時に阿あ菟ぬ楼る駄だ、衆しゅうの心こころを觀かん察さつして、而しかも仏ほとけに白もうして  
言もうさく、世せ尊そん、月つきは熱あつからしむべく、日ひは冷ひやかなら  
しむべくとも、仏ほとけの説ときたもう四し諦たいは、異いならしむ  
べからず。仏ほとけの説ときたもう苦く諦たいは、実じつに苦くなり、樂らく  
ならしむべからず。集しゅうは真まに是これ因いんなり、更さらに異い因いん  
なし。苦く若もし滅めつすれば即すなち是これ因いん滅めつす、因いん滅めつするが  
故ゆえに果か滅めつす。滅めつ苦くの道どうは実じつに是これ真しん道どうなり、更さらに余よ  
道どうなし。世せ尊そん、是この諸もろの比ひ丘く、四し諦たいの中なかに於おいて決けつ定じよう

して疑うたがい無なし。

此この衆しゅちゆう中に於おいて若もし所作しよさいま未べんだ弁べんぜざる者ものあらば、仏ほとけの滅めつ度どを見みて当まさに悲ひ感かんあるべし。若もし初はじめて法ほうに入いる者ものあれば、仏ほとけの所しよ説せつを聞きいて即すなわち皆みな得とく度どす。譬たとえば夜よる電でん光こうを見みて、即すなわち道みちを見みることを得うるが如ごとし。若もし所作しよさい已すでに弁べんじ已すでに苦く海かいを度わたる者ものは但ただ是この念ねんを作なすべし、世せ尊そんの滅めつ度ど一ひとえに何なんぞ疾すみやかなる哉やと。阿あ菟ぬ楼る駄だ、此この語ごを説といて、衆しゅちゆう中み皆みな悉ことごとく四し聖しやう諦たいの義ぎを了り達たつすと雖いえども、世せ尊そん此この諸もろもろの大だい衆しゅをして皆みな堅けん固こな

ることを得せしめんと欲して、大悲心を以て復た衆  
の爲めに説きたもう。

汝等比丘、悲悩を懐くこと勿れ。若し我れ世に住す  
ること一劫するとも、会うものは亦た当に滅すべ  
し。会うて而も離れざるること終に得べからず。自利  
利人の法は皆具足す。若し我れ久しく住するとも更  
に所益なけん。応に度すべき者は、若しは天上人間  
皆悉く已に度す。其の未だ度せざる者には、皆亦た  
已に得度の因縁を作す。自今已後、我が諸の弟子、



展てんでん転てんして之これを行ぎようぜば、即すなわち是これ如によらい来ほっしんの法つね身いま常にに在まし  
て而しかも滅めつせざるなり。是この故ゆえに当まさに知しるべし、世よは  
皆みな無む常じようなり、会あうものは必かならず離はなるることあり。憂う  
悩のうを懐いだくこと勿なかれ、世せ相そう是かくの如ごとし。当まさに勤つとめて精しよう進じん  
して早はやく解げ脱だつを求もとめ、智ち慧えの明みようを以もつて、諸もろの痴ち暗あんを  
滅めつすべし。世よは実じつに危き脆ぜいなり、牢ろう強ごうなる者ものなし。我わ  
れ今いま滅めつを得うること悪あく病びようを除のぞくが如ごとし。此これは是これ応まよ  
に捨すつべき罪ざい惡あくのものなり。仮かりに名なづけけて身みと為な  
す、老ろう病びよう生しやう死じの大だい海かいに没もつ在ざいせり。何なんぞ智ち者しやは之これを除じよ

滅めつすることを得うること、怨おんぞく賊ぞくを殺ころすが如ごとくにして、  
而しかも歡かんぎ喜ぎせざることと有あらんや。  
汝等なんだち比丘びく、常つねに当まさに一いっしん心しんに出しゅつ道どうを勤ごん求ぐすべし。一切いっさい  
世間せけんの動どう不ふ動どうの法ほうは、皆みな是これ敗はい壞え不ふ安あんの相そうなり。  
汝等なんだち且やく止やみね、復またた語ものいうこと得うること勿なかれ。時とき  
將まさに過すぎなんと欲ほつす、我われ滅めつ度どせんと欲ほつす。是これ我わ  
が最さい後ごの教きよう誨げする所ところなり。

# 普回向

願ねがわくは此この功徳くどくを以もつて、普あまねく一切いっさいに及およびし、我等われら

と衆生しゆじようと、皆みな共にともにぶつどう仏道じようを成なぜんことを。

十方じうほう三世さんせい一切いっさい仏ぶつ  
諸尊しよそん菩薩ぼさつ摩訶まか薩さつ  
摩訶まか般若ぼんげ若波じやくは羅密らみつ

# 在家略回向

仰あおぎこいねがわ冀さんぼうくは三宝、俯ふして照鑑しょうかんを垂たれたまえ。

上来じょうらい○○経きょうを諷誦ふじゆす、集あつむる所ところの功德くどくは、(戒名かいみょう)

当家家門とうけ先祖かもんせん代々ぞだいだい一切いっさい精靈しやうれい、六親眷属ろくしんけんぞく七世しちせの父母ぶも、

三界さんがいの万靈等ばんれいとうに回向えこうし、報地ほうちを莊嚴しやうごんせんことを。

# 普勸坐禪儀

原ぬるに夫れ、道本円通、争か修証を仮らん、宗乘  
自在、何ぞ功夫を費さん。況んや全体迥かに塵埃を  
出ず、孰か扨拭の手段を信ぜん。大都、当処を離れず、  
豈修行の脚頭を用うる者ならんや。然れども、毫釐  
も差あれば、天地懸に隔たり、違順纔かに起れば、  
紛然として心を失す。直饒、会に誇り、悟に豊かに  
して、瞥地の智通を獲、道を得、心を明めて、衝天

の志しい氣きを拳こし、入頭にっとうの辺量へんりょうに逍遙しょうようすと雖いえども、幾ほとんど出しゅつ  
身しんの活路かつろを虧闕きけつす。矧いわんや、彼かの祇園ぎおんの生知しやうちたる、  
端坐たんざ六ろく年ねんの蹤跡しやうせき見みつべし、少林しやうりんの心印しんいんを伝つたうる、面めん  
壁ぺき九く歳さいの声名しやうみやう尚な聞きこゆ。古聖こしやう既すでに然しかり、今人こんじん盃なんぞ  
弁べんぜざる。所以ゆえに須すべかかららく言ことを尋たずね語ごを逐おうの解行げぎやうを  
休きゆうすべし。須すべかかららく回光返照えこうへんしやうの退歩たいほを学がくすべし。身心しんじん  
自然じねんに脱落だつらくして、本来ほんらいの面目めんもく現前げんぜんせん。恁麼いんもの事じを  
得えんと欲ほつせば、急きゆうに恁麼いんもの事じを務つとめよ。  
夫それ参禅さんぜんは静室じやうしつ宜よろしく、飲おん食じき節せつあり。諸縁しよえんを放捨ほうしやし、

万事ばんじを休息きゅうそくして、善惡ぜんなくを思おもわず、是非ぜひを管かんすること  
 莫なかれ。心意識しんいしきの運うん転てんを停やめ、念想觀ねんそうかんの測しきり量ようを止やめて、  
 作さぶつ仏つを凶とること莫なかれ、豈あに坐臥ざがに拘からんや。尋常よのつね、坐ざ  
 処しよには厚あつく坐物ざもつを敷しき、上うえに蒲團ふとんを用もちう。或あるいは結跏けつか  
 跏ふざ坐あるい、或はんは半跏跏はんかふざ坐みぎ。謂いわく、結跏跏けつかふざ坐みぎは、先まず右みぎの  
 足あしを以もつて左ひだりの脛ももの上うえに安あんじ、左ひだりの足あしを右みぎの脛ももの上うえに  
 安あんず。半跏跏はんかふざ坐みぎは、但ただ左ひだりの足あしを以もつて右みぎの脛ももをお圧おす  
 なり。寬ゆるく衣帶えたいを繫かけて、齊整せいせいならしむべし。次つぎに  
 右みぎの手てを左ひだりの足あしの上うえに安あんじ、左ひだりの掌たなこころを右みぎの掌たなこころの上うえに

安<sup>あん</sup>じ、両<sup>りょう</sup>の大<sup>だい</sup>拇<sup>ぼ</sup>指<sup>し</sup>、面<sup>むか</sup>いて相<sup>あい</sup>拄<sup>さそ</sup>う。乃<sup>すなわ</sup>ち正<sup>しょう</sup>身<sup>しん</sup>端<sup>たん</sup>坐<sup>ざ</sup>して、左<sup>ひだり</sup>に側<sup>そば</sup>ち右<sup>みぎ</sup>に傾<sup>かたむ</sup>き、前<sup>まえ</sup>に躬<sup>くぐま</sup>り後<sup>しりえ</sup>に仰<sup>あお</sup>ぐことを得<sup>え</sup>ざれ。耳<sup>みみ</sup>と肩<sup>かた</sup>と対<sup>たい</sup>し、鼻<sup>はな</sup>と臍<sup>ほぞ</sup>と対<sup>たい</sup>せしめんことを要<sup>よう</sup>す。舌<sup>したうえ</sup>上の<sup>あぎと</sup>腭<sup>か</sup>に掛<sup>か</sup>けて、唇<sup>しん</sup>齒<sup>し</sup>相<sup>あい</sup>著<sup>つ</sup>け、目<sup>め</sup>は須<sup>すべ</sup>らく常<sup>つね</sup>に開<sup>ひら</sup>くべし。鼻<sup>び</sup>息<sup>そく</sup>微<sup>かす</sup>かに通<sup>つう</sup>じ、身<sup>しん</sup>相<sup>そう</sup>既<sup>すで</sup>に調<sup>ととの</sup>えて、欠<sup>かん</sup>気<sup>き</sup>一<sup>い</sup>息<sup>そく</sup>し、左<sup>さ</sup>右<sup>ゆう</sup>揺<sup>よう</sup>振<sup>しん</sup>して、兀<sup>ご</sup>兀<sup>ご</sup>として坐<sup>ざ</sup>定<sup>じよう</sup>して、箇<sup>こ</sup>の不<sup>ふ</sup>思<sup>しり</sup>量<sup>りよう</sup>底<sup>てい</sup>を思<sup>しり</sup>量<sup>りよう</sup>せよ。不<sup>ふ</sup>思<sup>しり</sup>量<sup>りよう</sup>底<sup>てい</sup>如<sup>い</sup>何<sup>かん</sup>が思<sup>しり</sup>量<sup>りよう</sup>せん。非<sup>ひ</sup>思<sup>しり</sup>量<sup>りよう</sup>。此<sup>こ</sup>れ乃<sup>すなわ</sup>ち坐<sup>ざ</sup>禅<sup>ぜん</sup>の要<sup>よう</sup>術<sup>じゆつ</sup>なり。



いわゆるざぜん しゅうぜん  
 所謂坐禪は習禪には非ず。唯是れ安樂の法門なり、  
 ぼだい ぐうじん しゅうしょう  
 菩提を究尽するの修証なり。公案現成、羅籠未だ到  
 らず。若し此の意を得ば、竜の水を得るが如く、虎  
 の山やまに靠よるに似にたり。当まごに知しるべし、正法しょうぼう自おのずから現前げんぜん  
 し、昏散こんさん先まず撲落ぼくらくすること。若し坐ざより起たたば、  
 じよじよ み うご  
 徐徐じよじよとして身みを動うごかし、安詳あんしょうとして起たつべし、卒暴そつぼう  
 なるべからず。嘗かつて観みる、超凡ちやうはん越おつしよう、坐脱ざだつ立りゅう亡ぼうも、  
 こ ちから いちにん  
 此この力ちからに一任いちにんすること。況いわんや復また、指竿しかん針しん錘つゐを拈ねん  
 ずるの転機てんき、弘拳ほっけん棒ぼう喝かつを拳こするの紹契しやうかいも、未いまだ是これ

思量しりよう分別ぶんべつの能よく解げする所ところに非あらず、豈あに神通じんずう修証しゆしやうの能よ  
 知しる所ところとせんや。声色しやうしきの外ほかの威儀いぎたるべし、那なんぞ  
 知見ちけんの前さきの軌則きそくに非あらざる者ものならんや。  
 然しかれば即すなわち、上智じやうち下愚かぐを論ろんぜず、利人りじん鈍者どんしやを簡えらぶこ  
 と莫なかれ。專一せんいつに功夫くふうせば、正まさに是これ弁道べんどうなり。修証しゆしやう  
 自おのずから染汚ぜんなせず、趣向しゆこう更さらに是これ平常びやうじやうなる者ものなり。凡およそ  
 夫それ、自界じかい他方たほう、西天さいてん東地とうち、等ひとしく仏印ぶつちんを持じし、一もつぱ  
 ら宗風しゆうふうを擅ほしいにす。唯打坐ただたざを務つとめて、兀地ごつちに礙さえらる。  
 万別まんべつ千差せんしやと謂いうと雖いえども、祇管しかんに參禪さんぜん弁道べんどうすべし。何なん

ぞ自家じけの坐牀ざじょうを抛却ほうきやくして、謾みだりに他国たこくの塵境じんきょうに去来きよらい  
 せん。若もし一歩いっぽを錯あやまれば、当面とうめんに蹉過しゃかす。既すでに人身にんしん  
 の機要きようを得えたり、虚むなしく光陰こういんを度わたること莫なかれ。仏道ぶつどうの  
 要機ようきを保任ほにんす、誰たれか浪みだりに石火せつかを楽たのしまん。加しか以のみ、形し  
 質しつは草露そうろの如ごとく、運命うんめいは電光でんこうに似にたり。倏忽しゆくこつとして  
 便すなわち空くうじ、須臾しゆゆに即すなわち失しつす。冀こいくは其それ参学さんがくの高こう  
 流る、久ひさしく模象もぞうに習ならつて、真竜しんりゆうを怪あやしむこと勿なかれ。  
 直指じき端的たんできの道どうに精進しやうじんし、絶学ぜつがく無為むゐの人ひとを尊貴そんきし、仏ぶつ  
 仏ぶつの菩提ぼだいに合沓がっとうし、祖祖そその三昧さんまいを嫡嗣てきしせよ。久ひさしく

憊いんも麼もなることを為なさば、須すべからく是これ憊いんも麼もなるべし。  
宝蔵ほうぞう自おのら開ひらけて受用じゅよう如意にょいならん。

## 五観ごかんの偈げ（食事の心得）

一ひとつには功こうの多少たしやうを計はかり彼かの来処らいしよを量はかる。

二ふたつには己おのれが徳行とくぎやうの全欠ぜんけつを付はかつて供くに応おうず。

三みつには心しんの防のぎ過ふせを離とがるるはなことは貪等とんとうを宗しゆうとす。

四よつには正まさに良薬りやうやくを事こととするは形枯ぎやうこを療りやうぜんが為ためなり。

五いつつには成道じやうどうの為ための故ゆえに今此いまこの食じきを受うく。

# 五観の偈ごかんの偈げ（意識）

- 一、おいしさを つくつてくれて ありがとう
- 二、ふり返ろうかえ 私のおこないわたし その心こころ
- 三、言わないい やめよう 好き嫌いす きら
- 四、身をつくりみ 心をつくるこころ よき薬くすり
- 五、いただきます 今を大事にいま だいじ 生きるためい

平成二十八年十二月八日発行

曹洞宗 天神山 貞昌院

横浜市港南区上永谷五―一―三  
電話 〇四五―八四三―八八五二  
FAX 〇四五―八四三―八八六四  
<http://teishoin.net>

印刷 雨宮印刷株式会社

北海道標津郡中標津町西九条南一丁目三番地  
電話 (〇一五三) 七二―二二三五番





